

(第3種郵便物認可)

全国パーキンソン病 友の会県支部長

尾山 充さん

おやま みつる

(富山市白銀町)

若年性のパーキンソン病患者。その苦悩に真正面から向き合い、他の患者の痛みに寄り添った。県支部発足当初から共に活動してきた前事務局長の中川美佐子さん(45)は「無邪気でもんちゃで、心根の優しい人。同じ患者のためなら」と精神的に動いてくれた」と振り返る。

建設会社に勤めていた20代後半に発症した。病状は少しずつ悪化。やがて失業を余儀なくされ、古里へ戻った。

「家でくすぶっていた」という人生を大きく変えたのが、2002年に開かれた県パーキンソン病友の会(県支部の前身)設立準備講演への参加。03年に設立された友の会役員に就き、05年には中川さんと共に難病作

業所「ワークスペース・ライヴ」を立ち上げ所長に就任した。「できなくなったことを嘆くより、できることを教えよう」「動かなければ出会えない」をモットーに全国に人脉を広げた。

好評だったのが、中川さんと共に難病患者の自宅や病院を訪ねて話を聞く連載「ミサとミッツの難病訪問記」。友の会通信に掲載され、パーキンソン病以外の病気も知ってほしいと数回の執筆を全て担当した。人柄そのままの明るく軽妙な文章で人気を集めた。

09年に県内で初めて開かれた全国パーキンソン病友の会全国大会では、実行委員長として運営を取り仕切った。県支部事務局長の木島律子さん(56)は「数

患者や家族 全力で支援

千人分のホテルの手配など実務の大半を担ってくれた。コンピュータのような頭脳を持つ尾山さんがいてこそその成功」と感謝する。

11年に3代目の県支部長に就任後も、病と闘いながら患者の支援に力を尽くした。3カ月に1度の黒部市民病院への通院の際は、入善町の実家に泊まり、母の貞子さん(86)の手料理を味わい晩酌を楽しんだ。貞さんは「いろんな話をして楽しい時

間だった。いつもこの日を心待ちにしていた」と語る。

別れは突然だった。7月20日、一人暮らしする富山市内のマンションで倒れているのが見つかった。急性循環不全だった。

「私にとって友の会は地獄に差し込んだ一筋の光明でした」。友の会県支部の10周年記念誌につづった一文だ。患者や家族を支え、自身もその活動に支えられた人生だった。

(文化部・中田真紀)

2016年7月18日、56歳で死去



全国パーキンソン病友の会の全国大会に、事務局長の木島さんと出席した尾山充さん(左)＝2015年6月、茨城県水戸市